

東児童センター 利用者アンケート結果報告書

— 小学生・中学生・高校生を対象とした調査 —

令和 8 年 8 月 3 0 日

東児童センター

実施期間：令和 8 年 7 月 2 0 日～7 月 3 1 日

1. 調査の概要

本調査は、東児童センターを利用する小学生・中学生・高校生を対象に、施設の「いごこち（居心地・所属感）」と「やりたいこと・活動」への実感、および自由記述による声を把握する目的で実施した。無記名式で、各項目を 4 段階で尋ねた。

項目	内容
対象	東児童センターを利用する小学生・中学生・高校生
有効回答数	25 名
方法	無記名式アンケート（4 段階評価および自由記述）
評価尺度	4（とてもそう思う）～1（そう思わない）の 4 段階

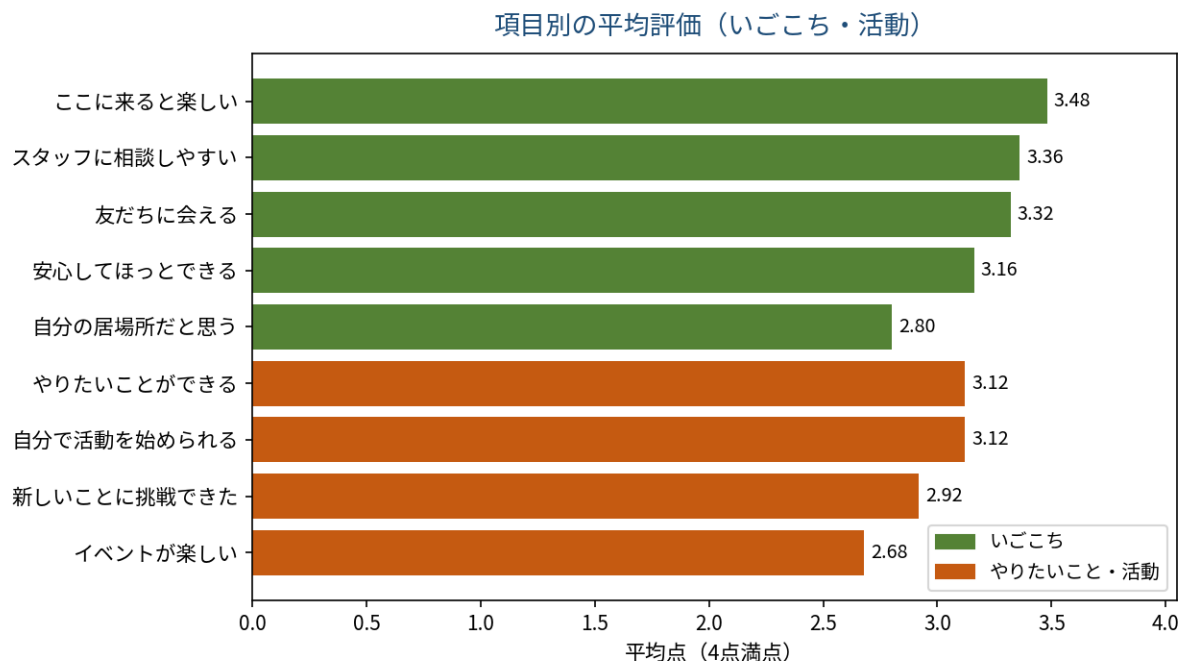
2. 回答者の構成

学年は小 1～中学生に分布し（高校生の回答はなし）、小 5～6 が最も多かった。来館頻度は「ときどき」「週に数回」が中心で、多くは**友だちと来館**している。

学年帯	人数	主な来館頻度	主な同伴
小 1～4	8	ときどき／ほぼ毎日	友だち・ひとり
小 5～6	10	ときどき／週に数回	友だち
中学生	7	ときどき／週に数回	友だち

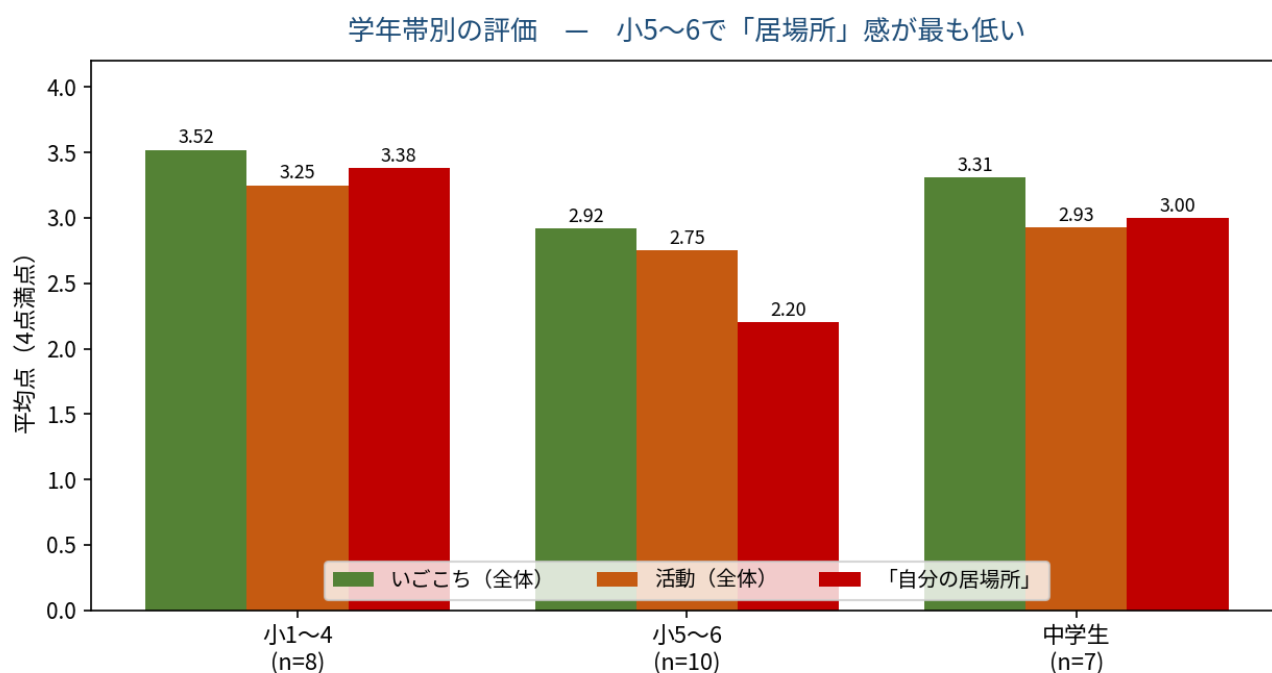
3. いごこちと活動の結果

全体として、「ここに来ると楽しい」（平均 3.48）は高い一方、「自分の居場所だと思う」は 2.80 と最も低い。来れば楽しいが、自分の居場所とまでは感じきれていない子が一定数いることを示す。活動面では「イベントが楽しい」（2.68）「新しいことに挑戦できた」（2.92）が低めで、より満足できる活動への余地がある。乳幼児版（満足度・価値とも 3.8 前後）と比べて全体に低く、2・1 の回答も見られるが、これは子どもが率直に答えた結果であり、健全なデータと考えられる。



4. 学年帯による違い（最重要）

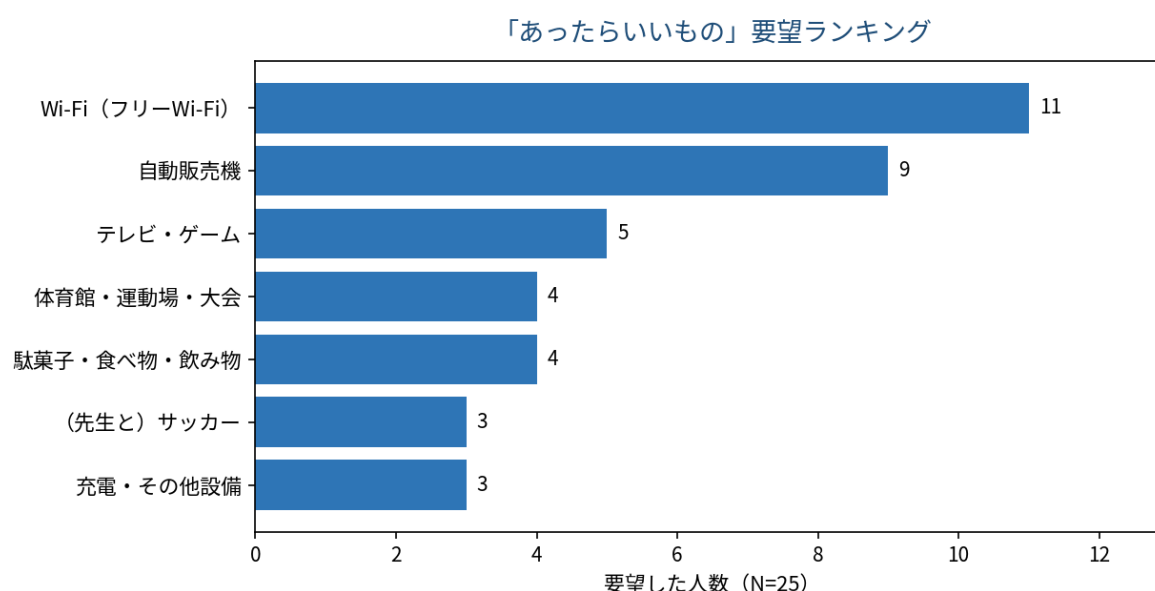
「自分の居場所」感は学年帯で大きく異なる。小1～4では3.38と高いのに対し、小5～6では2.20まで低下し、中学生は3.00であった。小5～6という高学年層が、最も「ここは自分の居場所」と感じられていない。自由記述でも高学年・中学生から「大勢いて遊べない」「子どもがうるさい」「治安が悪い」「あぶない」「ケンカがある」といった声が挙がっており、小さい子と同じ空間であることへの居づらさがうかがえる。



これは、施設が低年齢児にとっては居場所として機能している一方、高学年～中高生には所属感の面で課題があることを示す。中高生の居場所づくりが求められる今、対応の必要性を裏づける結果である。

5. 「あったらいいもの」要望ランキング

自由記述の要望は驚くほど一貫しており、**Wi-Fi（11名）と自動販売機（9名）**が突出している。次いでテレビ・ゲーム、体育館・運動場・大会などの運動環境、駄菓子・飲食物を飲食できるが続く。10代向けの環境整備への強いニーズが読み取れる。



※ 自由記述の語句を集計（複数回答含む、N=25）。少数意見として充電設備・ウォーターサーバー・空気清浄機なども挙がった。

6. 自由記述の傾向

スタッフへは「やさしい」「一緒に遊んでくれてありがとう」「いつもありがとうございます」など好意的な言葉が多く、**職員との関係は良好**である。「涼しい」を“好きなところ”に挙げる子が複数おり、夏場の居場所（暑さしのぎ）としての役割もうかがえる。改善・要望としては、前述の設備面に加え、「**4年生以上の貸しきりの日をつくる**」「**自由なのはいいけれど規則はしっかりしてほしい**」など、高学年・中高生が落ち着いて過ごせる時間やルールを求める声が見られた。

7. まとめと今後への示唆

強み 「楽しい」という実感と、職員との良好な関係。低年齢層には居場所として機能している。

課題 高学年（小5～6）を中心とした所属感（居場所感）の低さと、活動（挑戦・イベント）への物足りなさ。小さい子と同一空間であることへの居づらさ。

改善アクション

- 高学年・中高生向けの時間帯やゾーニング（「4年生以上の時間」など）の検討します。
- Wi-Fi・自動販売機（飲料）・充電など、10代のニーズに合う環境整備を岐阜市と検討します。
- 体育館・運動場を活かした運動プログラムや、挑戦・主体性を引き出す企画の充実させます。
- 安心して過ごせる環境づくりのための利用ルールをこどもたちと話し合います。